国立国語研究所学術情報リポジトリ

関東・東北地域における動詞ラ行音節の撥音化と促音化の実態：日本語諸方言コーパス（COJADS）のデータより

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-07-12 キーワード (Ja): 日本語諸方言コーパス（COJADS）, 関東・東北方言, ラ行音節, 撥音化, 促音化 キーワード (En): Corpus of Japanese Dialects (COJADS), Tohoku and Kanto dialects, /r/ syllable, moraic nasal alternation, geminate alternation 作成者: 佐藤, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000276

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial 4.0 International License.

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 27: 19–34 (2024) Licensed under CC BY-NC
ISSN 2186-1358

関東・東北地域における動詞ラ行音節の撥音化と促音化の実態
——日本語諸方言コーパス（COJADS）のデータより——

佐藤久美子

国立国語研究所 研究系 非常勤研究員

要旨

日本語の自然談話では，子音 /r/ を含む音節（以下，ラ行音節）が撥音化・促音化することがある（例えば，「ワカラナイ」が「ワカンナイ」，「クルカラ」が「クッカラ」）。このような現象は日本全国に見られるが，それが地理的に偏って分布していること（上野（編）1989），頻度や環境は方言によって異なることが部分的に指摘されている（大橋 1974，日野 1984，田附 2019 など）。本稿では日本語諸方言コーパス（Corpus of Japanese Dialects: COJADS）を用いて，関東・東北地域の自然談話データに見られる動詞ラ行音節の撥音化・促音化の実態を報告する。具体的には，以下の三つを指摘する。(i) 撥音化と促音化の現象は関東･東北地域に連続して分布しており，宮城･福島･茨城を中心として，その周辺に広がっている（ii）撥音化と促音化の頻度は強い相関があるが，一方に偏る方言がある（iii）撥音化と促音化が起こる音環境には方言間のバリエーションがある *。

キーワード：日本語諸方言コーパス（COJADS），関東・東北方言，ラ行音節，撥音化，促音化

1. はじめに

日本語の自然談話では，子音 /r/ を含む音節（以下，ラ行音節）が撥音化･促音化することがある。これは，ラ行音節が直後の子音に同化することで生じる音交替である。（1a）はラ行音節の「ラ」が直後の子音 /n/ に同化する例，（1b）は「ル」が /k/ に同化する例である。

（1） a. ワカラナイ 「分からない」　　b. クルカラ 「来るから」
　　ワカンナイ　　クッカラ

上野（編）（1989: 72）では，ラ行音節がナ行音節の直前で撥音化し，カ行・タ行音節の直前で促音化するという現象が日本の各地に広く見られることが述べられている。

撥音化・促音化の詳細な地理的分布については，大橋（1974）による関東地域の言語地理学的な大規模調査研究の中に記述がある。大橋（1974）では関東地域の 276 地点において質問調査が行われており，その中にラ行音節の撥音化･促音化に関わる質問が 8 項目含まれている。その内，

* 本稿は 2022 年 8 月 31 日（水）に開催された「言語資源ワークショップ 2022」（於：国立国語研究所）にて行ったポスター発表「関東・東北方言における動詞ラ行音節の撥音化と促音化—COJADS データより—」を修正し，大幅な加筆を行い，再構成したものである。本研究の一部は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）および JSPS 科研費 21H04351，18K12395，17K02689 の成果である。執筆にあたり貴重なコメントをくださった松浦年男氏（北星学園大学），上村健太郎氏（国立国語研究所），そして査読者に心より感謝申し上げる。

四つの例を以下に挙げる[1]。

(2) a. 撥音化：わからない
明日降らなければ
行かなければならない
b. 促音化：釣れるかい？

(2) の調査結果に基づき，撥音化は関東地域全域に見られるが，語彙によっては茨城・栃木・千葉に偏って分布していること，促音化は茨城・栃木・千葉が中心となって分布していることが述べられている。更に，撥音化・促音化が福島に及んでいることに言及しており，この現象が関東と東北にまたがって連続的に分布している可能性を強く示唆している。

音交替の環境に関しては，日野（1984）と木川・久野（2012）が神奈川県の特異性を指摘している。神奈川県小田原市では，他方言で促音化が期待される環境，もしくは音交替が期待されない環境で撥音化が生じる。(3) に木川・久野（2012）で調査されている項目の一部を挙げる。

(3) a. スント 「すると」 b. アンヨ 「あるよ」
ネンカラ 「ねるから」 ネンゾ 「寝るぞ」
ネンカ 「寝るか」 （木川・久野 2012: 94，表 2 より抜粋）

(3a) は /t, k/ の直前でラ行音節が促音化することが期待される環境であるが，撥音化が生じている例である。(3b) は /j, z/ の直前で音交替が期待されない環境であるが，撥音化が生じている例である。神奈川に見られる現象は，撥音化・促音化が生じる音環境が方言によって異なり得ることを示している。

更に，田附（2019）では，宮城県名取市において促音化が期待されない環境で促音化が生じることが指摘されている[2]。

(4) a. ガンバッサイ 「頑張りなさい」
b. アガッセイ 「あがりなさい」
c. カエッセ 「帰りなさい」

(4) は，それぞれ「ガンバラサイ」「アガラセイ」「カエラセ」が促音化したものとして分析されている。いずれも，/s/ の直前でラ行音節が促音化している。名取市の現象も，上述の神奈川と同様に，撥音化・促音化といった音交替が生じる環境が方言によって異なり得ることを示している。

ラ行音節の撥音化・促音化に関しては，個別方言における記述がある一方，日本語諸方言を対

[1] 大橋（1974）では，動詞ラ行音節の他に「危ないから」「それだから」「それでもいいのか」「おれでは」が調査されている。
[2] 田附（2019）は，宮城県気仙沼市と名取市におけるラ行音節の詳細な音交替を記述している。そこでは，撥音化・促音化という音交替に留まらず，ラ行音節の /r/ の脱落や無声化についても言及している。これらもラ行音節の振る舞いの方言差を捉える上で重要な現象であると考えられるが，本稿の範囲を超えるためここでは扱わない。

象とした通方言的な詳細な記述は管見の限り見当たらない。そこで，県ごとの音声文法の概要が参照可能な『講座方言学』（飯豊他（編）1982–1984, 第 4 ～ 9 巻）と, 関連項目が観察可能な『方言文法全国地図（GAJ)』の地図を用いて，撥音化･促音化が見られる地域を示す。はじめに,『講座方言学』での記載の有無を見ていく。

『講座方言学』第 4 巻から第 9 巻を用いて, ラ行音節の撥音化･促音化に関する記述を収集した。表 1 に, 記述のある地方名と県名あるいは地域名を示す [3]。これらの名称は全て『講座方言学』に従う。

表 1 『講座方言学』に記載のある地域

地方	県・地域
北海道・東北地方	岩手県，宮城県，山形県，福島県
関東地方	茨城県，栃木県，群馬県，埼玉県
中部地方	新潟県
近畿地方	淡路島
中国・四国地方	広島，島根県隠岐郡，鳥取，香川，徳島
九州地方	福岡，壱岐・対馬

『講座方言学』に記載のある地域は大きく東西に分かれている。東部は東北と関東, 西部は中国･四国と九州であり，その中間の中部と近畿には新潟県と淡路島を除いて記載がない。

次に,『方言文法全国地図 3 集』第 116 図「来られると」における促音化の分布を見てみる。この地図では，異なる語形「来られれば」を用いる青森県と秋田県を除いて，広範囲で助詞「と」が後続する環境における促音化の有無を見ることができる。促音化が起こる地域は大きく東西に分かれている。

表 2 『方言文法全国地図 3 集』第 116 図「来られると」で促音化が起こる地域

地方	県・地域
北海道・東北地方	岩手県，宮城県，山形県，福島県
関東地方	茨城県，栃木県，千葉県
中部地方	新潟県
中国・四国地方	島根県隠岐の島
九州地方	福岡県，佐賀県，長崎県，熊本県，鹿児島県，宮崎県

このような粗い方法で全国的な分布を述べることは非常に危険であるが，ラ行音節の撥音化・促音化は東北・関東地域と中国・四国・九州地域の東西に偏って分布しており，両者の間にある中部と近畿地域にはそれらが観察されない一帯が広がっている可能性が示唆される。

以上のことを踏まえて，本稿では当該の現象が顕著に見られ，かつ語形が類似している東部の関東・東北地域に対象を絞り，動詞ラ行音節の撥音化・促音化について，地理的分布とそれが生

[3]「カイトン（書いている／書いとる）」〈内海諸島〉や「フッ（降る）」〈佐賀〉のように, 撥音化･促音化であっても，同化現象ではない例のみが記載されていた地域はここに示さない。

じる音交替の環境の方言差を記述する。地理的分布に関しては，撥音化と促音化で若干異なる様相が見られることを明らかにする。音交替の環境に関しては，方言間のバリエーションを述べるとともに，促音化の有無に直後の子音の有声性が関わるか否かという観点から方言差を示す。

2. 調査手法

2.1 データの内容

本稿で扱うデータは日本語諸方言コーパス（以下，COJADS）から抽出したものである。COJADS の基となるデータは, 1977 ～ 1985 年に文化庁が行った「各地方言収集緊急調査」によって収録された談話音声・文字化データである。本稿が調査を行った時点では Ver. 2022.03 が公開されており, 関東･東北地方については, 16 地点のデータが公開されている。談話ジャンルは「自然談話」「場面設定」「語り」の三つである。自然談話は 2 名以上の話者が特定のテーマで話し合う自由会話であり，場面設定は 2 名の話者が挨拶や依頼などのテーマごとに用意された台詞を話す会話であり，語りは 1 名の話者の自由な独話である。調査対象のデータには，全地点の「自然談話」，青森・宮城・群馬・東京の「場面設定」，青森・群馬・千葉の「語り」が含まれる。表 3 にデータ内容の詳細を記す。データの長さが地点ごとに大きく偏っており，談話ジャンルも地点ごとに異なっているが，平均 2 時間 24 分 37 秒（標準偏差 2 時間 23 分 51 秒），最小 25 分 52 秒で少なくとも 30 分程度のデータが確保できる。本稿では, 表 3 のデータに基づいて考察を進める。

表 3　COJADS データ内容（Ver. 2022.03）

県	地点	談話ジャンル			県番号 _ 地点 ID	時間数（時間 : 分 : 秒）
		自然	場面	語り		
青森	北津軽郡市浦村	✓			02_b	3:37:26
	弘前市	✓	✓	✓	02_e	
岩手	遠野市	✓			03_c	0:46:59
宮城	仙台市	✓	✓		04_c	2:51:44
秋田	湯沢市	✓			05_e	0:25:52
山形	東田川郡櫛引町	✓			06_c	0:26:51
福島	大沼郡会津高田町	✓			07_b	1:18:03
	大沼郡昭和村	✓			07_c	
茨城	高萩市	✓			08_a	1:43:01
	水戸市	✓			08_c	
栃木	日光市	✓			09_b	0:34:44
群馬	前橋市	✓			10_c	9:31:38
	甘楽郡下仁田町	✓	✓	✓	10_e	
埼玉	児玉郡上里町	✓			11_d	0:37:57
千葉	印旛郡印西町	✓			12_b	3:08:08
	長生郡長生村	✓		✓	12_c	
東京	台東区	✓	✓		13_a	4:10:54
	西多摩郡檜原村	✓	✓		13_b	
神奈川	小田原市	✓			14_d	2:06:44

2.2 データの抽出方法

音交替の有無を方言間で対照するために，全ての方言において同一の条件でデータの抽出を行った。撥音化については，「分からない」「取らない」「やらない」等，動詞未然形に「ない」が後続する環境で，ラ行音節「ラ」が撥音化するかどうかを調査した。動詞の否定形はいずれの方言においても出現頻度が高く，同一条件で大量のデータを得られるという利点がある。促音化については，「来ると」「見るから」「するよ」等，動詞終止形に助詞が後続する環境で，ラ行音節「ル」が促音化するかどうかを調査した。関東地域と東北地域では，動詞否定の形式や助詞の形式が概ね一致するため，このような横断検索が可能である。

データの抽出は，国立国語研究所で開発されたコーパスアプリケーション「中納言（2.6.0）」での検索によって行った。検索は標準語と方言の両方で可能であるが，標準語では語彙素や品詞，活用形等の形態素情報を利用した検索ができる。本稿では，標準語において検索条件を設定し，関東・東北地域を横断的に検索した。

撥音化の調査のための検索条件は次の通りである。検索キーを「品詞 - 大分類 - 動詞」とし，短単位条件「活用形 - 大分類 - 未然形」を追加した。そして，後方共起条件の追加「語彙素 - ない」とした。検索対象で各県を選択して検索し，検索結果をダウンロードした上で，観察対象とするラ行音節を含むデータを取り出した。促音化の調査では，検索キーを「品詞 - 大分類 - 動詞」とし，短単位条件「活用型 - 大分類 - 終止形」を追加，後方共起条件を「品詞 - 大分類 - 助詞」とした。データのダウンロードと整理は上述の撥音化の調査と同様である。

一例として，宮城の撥音化と茨城の促音化のデータ抽出のための検索条件式を下に記す。

(5) a. 宮城の撥音化の検索条件式
キー : (品詞 LIKE “ 動詞 %” AND 活用形 LIKE “ 未然形 %”)
AND 後方共起 : 語彙素 =“ ない ” ON 1 WORDS FROM キー DISPLAY WITH KEY
IN 県 =“ 宮城 ”

b. 茨城の促音化の検索条件式
キー : (品詞 LIKE “ 動詞 %” AND 活用形 LIKE “ 終止形 %”)
AND 後方共起 : 品詞 LIKE “ 助詞 %” ON 1 WORDS FROM キー DISPLAY WITH KEY
IN 県 =“ 茨城 ”

3. 結果

撥音化と促音化のそれぞれについて，各地における観察対象となるデータの総数，そのうち音交替が起こったデータの数と，そこから求められる音交替の割合を示す。以下，3.1 節で撥音化について，3.2 節で促音化について述べる。

これ以降，地点の区別をせず，県名のみを挙げることにする。青森や福島など，調査地点が複数ある場合もそれぞれ「青森」「福島」とまとめる。

3.1 撥音化

撥音化の割合を表 4 に示す。撥音化の頻度は地点によって大きく異なっている。80% を超えているのが宮城・福島・茨城・栃木であり，対して，20% 以下となっているのが青森・秋田・山形・東京である。一見して，東北地域においても関東地域においても内部で頻度にばらつきが見られる。

表 4　撥音化の割合

地点	割合	数	総数
青森	**10.0%**	9	90
岩手	**50.0%**	8	16
宮城	**91.1%**	51	56
秋田	**0.0%**	0	12
山形	**20.0%**	2	10
福島	**94.0%**	63	67
茨城	**94.9%**	94	99
栃木	**95.0%**	19	20
群馬	**24.4%**	63	258
埼玉	**25.0%**	2	8
千葉	**66.3%**	59	89
東京	**16.0%**	20	125
神奈川	**31.1%**	14	45

図 1 に撥音化の地理的な広がりを示す。割合の高さを塗りつぶしの色の濃淡で表す。図 1 からは，撥音化の頻度は宮城・福島・茨城・栃木を中心に高くなっており，その周辺にいくにしたがい，段階的に低くなっていることがうかがえる。

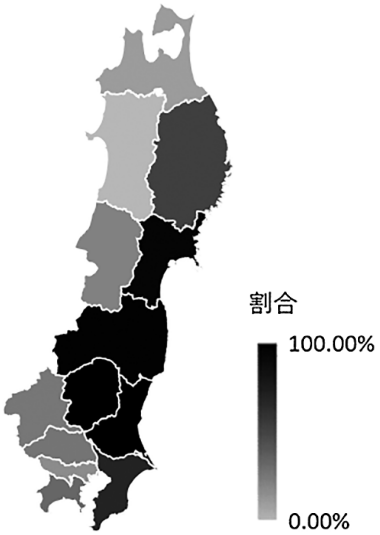

図 1　撥音化の広がり

以下に，撥音化の頻度の高かった地点を中心に実例を挙げる。各例の下に，［県名 _ 県番号 _ 地点 ID_ ジャンル・ファイル番号 _ 発話開始番号］を記す。以下，例において撥音化・促音化が生じている部分を下線で示す。

(6)　撥音化の例

a. スマテ　オエダラ　エッシェンニモ　ナンネナーテ　コー　ユーノサ。
しまって おいたら　一銭にも　ならないなあ」って　こう　いうのさ。
［宮城 _04_c_001_88549］

b. ヨグ ミ　インネーデ　ハヤグ　オズッツマーンダワイ　アレ。
よく 実 [が] 入らないで　早く　落ちてしまうんですよ　あれ。
［福島 _07_b_001_41190］

c. ユギカ゜ムガシノ ヨーニ　フンネー　チューノモ　コレ　ドー　ユー　ゴドガネ。
雪が　昔の　ように　降らない　というのも　これ [は] どう　いう　ことかね。
［茨城 _08_a_001_115360］

d. カキモ イマワ　トンネシネー。
柿も　今は　とらないしね。　［栃木 _09_b_099_68590］

e. オリァ ハー　ホンートニ　ワゲ　ワガンネ　アエズ。
私は　もう　本当に　わけ [が] わからない　あいつ。　［岩手 _03_c_099_990］

f. リソグダゲデ トラレテ　ホデ　ヒトッツモ　モド　ヘンネーダ　ッチンダ。
利息だけで　とられて　それで　ひとつも　もと [が] 減らない [の] だというのだ。
［千葉 _12_b_014_72380］

3.2 促音化

促音化の調査は，前節で述べた通り，動詞終止形に助詞が後続するという環境で行った。全国的な状況と同じく, 関東･東北地域においても, 促音化が起こるのは多くの場合「ト･カラ･カ」等, 語頭子音が破裂音 /t, k/ である助詞が後続したときであった。また，関東・東北地域では，これらの助詞の語頭子音が有声化する方言がある。これら有声化した子音 /d, g/ が後続したときに促音化が起こるかどうかは方言ごとに異なっていることがわかった。はじめに，後続子音の有声性を区別せず, 破裂音 /t, k, d, g/ の直前での促音化の有無を記述する。次に, 有声性を区別した上で, そこにも方言差が見られることを指摘する。

促音化の割合を表 5 に示す。促音化の頻度も地点によって大きく異なっている。80% を超えているのが宮城・福島であり，対して，20% 以下となっているのが青森・秋田・群馬・埼玉・東京・神奈川である。頻度の幅の広さと地域内でのばらつきの大きさは撥音化の状況と同様である。

表 5　促音化の割合

地点	割合	数	総数
青森	**0.0%**	0	51
岩手	**61.5%**	16	26
宮城	**90.1%**	137	152
秋田	**0.0%**	0	12
山形	**77.1%**	37	48
福島	**95.3%**	101	106
茨城	**77.5%**	62	80
栃木	**53.3%**	16	30
群馬	**1.7%**	9	523
埼玉	**9.5%**	2	21
千葉	**60.5%**	92	152
東京	**5.0%**	13	258
神奈川	**2.1%**	2	96

図 2 に促音化の地理的な広がりを示す。図 2 と図 1 を比べると，中心が東北地域に寄って，そこから周辺に向かって段階的に低くなっていることがうかがえる。

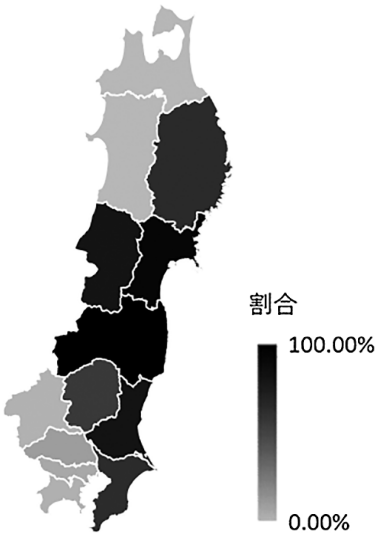

図 2　促音化の広がり

次に，ラ行音節に後続する子音の有声性に着目して，促音化の有無を観察する。関東・東北地域では助詞が有声化することがあり，「来るから」と「来るがら」のような揺れが見られる方言がある。このような方言において，促音化が直後の子音の有声性に影響を受けるかどうかを見ていく。

表 6 は, 表 5 を後続する子音が無声である場合と有声である場合に分けて整理したものである。

表 6　促音化における後続子音の有声性の影響

地点	無声子音（__ /t, k/）			有声子音（__ /d, g/）		
	割合	数	総数	割合	数	総数
青森	**0.0%**	0	32	**0.0%**	0	19
岩手	**94.1%**	16	17	**0.0%**	0	9
宮城	**93.8%**	90	96	**83.9%**	47	56
秋田	**0.0%**	0	2	**0.0%**	0	10
山形	**100.0%**	1	1	**76.6%**	36	47
福島	**98.1%**	101	103	**0.0%**	0	3
茨城	**82.4%**	61	74	**16.7%**	1	6
栃木	**53.3%**	16	30	−	0	0
群馬	**1.8%**	9	503	**0.0%**	0	20
埼玉	**10.5%**	2	19	**0.0%**	0	2
千葉	**63.1%**	82	130	**45.5%**	10	22
東京	**5.0%**	13	258	−	0	0
神奈川	**2.1%**	2	96	−	0	0

促音化が後続子音の有声性に影響を受けていると考えられるのは岩手と福島と茨城である。三者には，無声子音が後続する環境では非常に高い割合で促音化が起こっているが，有声子音が後続する環境では促音がほぼ起こらないという共通点が見られる。この理由を，高山（2012）と松浦（2018）に基づき，方言特有の音配列である「有声子音の連続」の制限によるものであると考える。

有声子音の連続について，高山（2012）は各地方言の記述を参照し，全国規模でその有無をまとめている。そこでは，関東・東北地域では有声子音の連続が見られないことが述べられている。これに従えば，岩手と茨城では有声子音の連続を生み出すことを避けるため，有声子音が後続する環境ではラ行音の促音化が起こりにくいと考えられる。

一方，高山（2012）の記述と矛盾するのが宮城と山形である。この二地点では有声子音が後続する環境でも促音化が起きている。すなわち，「有声子音の連続」の制限が強く働いていない，あるいは全く働いていないようである。山形における有声子音の連続については，松浦（2018）に詳しい記述がある。山形県村山方言では，本稿が対象としている「動詞終止形に助詞が続く」という環境も含めて，特定の形態音韻論的環境において有声子音の連続が見られることが指摘されている。同様の状況が宮城にも存在する可能性がある。これに関しては，今後の調査研究で明らかにしたい。

以下に，促音化の程度が顕著に高かった地点と中間にある地点の実例を挙げる。(7) は無声子音が後続する場合である。

(7)　促音化（__ /t, k/）の例

a.　ウ　ソノー　タモ　ハダゲモ　イッペ　アッカラ　ソノ。
　　うん その　田も　畑も　たくさん　あるから　その。［岩手 _03_c_099_3610］

b. アスグデ　フフケンカニ　ナット　モッタノサワ。
あそこで　夫婦けんかに　なると　思ったのさ SP[4]。　［宮城 _04_c_010_100920］

c. ボサンオ ヨルニ　スル　シューカンノ　トゴロモ　アッケドモ　マルオカワ
墓参を　夜に　する　習慣の　ところも　あるけれども　丸岡は
ヒルマ n ンダロ[5]。
昼なのだろう。　［山形 _06_c_099_116960］

d. シタサ ヌ　ヌゲット　トマッテ　キーット　シテ　イーシケ。
下に　ヌ　抜けると　止まって　キッと　して　いた。　［福島 _07_c_099_46850］

e. オガネ　モラエンダラ　ヤッカラッテ　ユーダ　ッチノニ
お金 [を]　もらえるのなら　やるからと　いう [の] だ　というのに
［茨城 _08_a_005_67680］

f. アッケドー　ホラ　イマミテーニ　ナンデモ　アル　トキジャ　ナカッタカラー。
あるけれど　ほら　今みたいに　何でも　ある　ときでは　なかったから。
［栃木 _09_b_099_65850］

g. センセン　ナレットガ　ヤクニンニ　ナレリャ　マダ　エーヤ。
先生に　なれるとか　役人に　なれれば　まだ　いいや。
［千葉 _12_b_014_12110］

（8）は有声子音が後続する場合である。

（8）　促音化（__ /d, g/）の例

a. ハジマンショーカ゜ッコー　デッド　ダワネ　ンデネ。
八幡小学校 [が]　出来ると　だよね　それで [は] ね。
［宮城 _04_c_001_4690］

b. テンオ　アケ゜ッガラ。
ところてんを あげるから　［山形 _06_c_099_96940］

c. シンタクンダンナト オレ　オリンノワ ミタダケンド　ネボゲテッガラネー。
新宅の　旦那と　俺 [は] 降りるのは 見た [の] だけれど 寝ぼけているからねえ。
［千葉 _12_b_012_16370］

3.3 環境のバリエーション

促音化の調査は，動詞終止形に様々な助詞が後続する環境で行った。ほとんどの場合，促音化は破裂音が後続した環境で見られたが，非常にわずかではあるが，それ以外の環境で促音化が生じる例が見つかった。以下に実例を示す。

[4] COJADS では方言テキストに対応する標準語がない場合，その存在をタグによって明示している。この「SP」は方言テキストの終助詞「ワ」に対応するものである。
[5] COJADS では前鼻音を「n」で表している。この例は「ヒルマ n ダロ」の誤りであると思われる。

山形では，摩擦音が後続する環境で促音化が起こっている。（9a, b）はいずれも接続助詞「から」に相当する「サケ」「ハゲ」[6] が後続した環境である。

（9）　促音化（__ /s, h/）の例

a.　アノ　カッダ　ゴドモ　アッサケ。
　　あの　買った　ども　あるから　［山形 _06_c_099_57300］

b.　アド　ボン　キテヤー　ハダゲシゴ　ハダラガイナグ　ナッハゲ。
　　あと　盆［が］来て　畑仕事　働けなく　なるから。
　　［山形 _06_c_099_30230］

摩擦音が後続する環境での促音化は 6 例中 4 例に見られ，ある程度安定しているようである。ただし，4 例は全て同一の助詞が後続した場合であり，それ以外には見られない。

続いて，千葉の例を見る。千葉では，接近音が後続する環境で促音化が起こっている。（10）は「ワ」が後続した環境である。なお，/w/ が後続する環境での促音化は 6 例中この 1 例だけである。

（10）　促音化（__ /w/）の例

「アッカ　アソエ　カイグンガ　クッワエ」ト　X6 ドンガ　ソエタダヨネー。
「あれ　あそこへ　海軍が　来るわ」と　X6 さんが　言ったんだよね。
［千葉 _12_b_099_139710］

次に，撥音化の環境のバリエーションを見ていく。撥音化は通常，鼻音が後続する環境で起こるが，それ以外の環境でも見られることを例示する。はじめに，破裂音が後続する環境で撥音化が起こっている例を挙げる。神奈川では，特定の助詞によらず，この環境で安定した頻度で撥音化が見られる。

（11）　神奈川：破裂音が後続する環境での撥音化

a.　ホント　イマデ　カンカ゜エント　ナンダッテ　テズクリダモン。
　　本当［に］今で　考えると　なんだって　手作りだもの。
　　［神奈川 _14_d_001-2_49280］

b.　モチツキカ゜　サキニ　ナンカラ。
　　餅つきが　先に　なるから　［神奈川 _14_d_001-1_15810］

c.　ヨモキ゜モ　ケッコー　ノビテ　クンケンドヨ。
　　蓬も　結構　伸びて　来るけれどね。　［神奈川 _14_d_002-2_43630］

d.　ミンナカ゜　ソー　ユー　フーニ　カンケ゜ーエテ　インカ　ドーカ。
　　みんなが　そう　いう　ふうに　考えて　いるか　どうか。
　　［神奈川 _14_d_099_16290］

[6] 近畿に広く分布する接続助詞「サカイ」が変化したものである。

破裂音が後続する環境 96 例中 35 例に撥音化が見られ，およそ 36% の割合となっている。3.2 節で述べた通り，同一環境において促音化はほとんど見られない。

神奈川以外にも，破裂音が後続する環境での撥音化が若干見られる。山形で 4 例，福島と茨城で 2 例ずつ，栃木と千葉に 1 例ずつある。ただし，これらの地点では神奈川のように安定した現象ではなく，臨時的である可能性が高い。これらの地域では，同一環境において，圧倒的に促音化の頻度が高い。

（12） 神奈川以外：破裂音が後続する環境での撥音化

a. ミンナ　ナベサ　アゲ　イレデ　ソー　スンド　コサ　イッダ　ウジガラ
みんな　鍋に　アゲ　入れて　そう　すると　ここに　入れた　うちから
［山形 _06_c_099_8490］

b. イネムリ　シテ　コー　クッツイデントナン。
居眠り　して　こう　くっついているとですね。　［福島 _07_b_002_42110］

c. ソシタラ　ヤッパリ　コドモ　ドンドン　ヘッテンガラ
そうしたら　やっぱり　子供 [が]　どんどん　減っているから
［茨城 _08_a_001_83080］

d. X10 ヤンワ　イマデモー　インカイ。
X10 さんは　今でも　いるかい。　［栃木 _09_b_099_39660］

e. アノ　シトナンカ　アレ　カワリモンダガラ　ジショ　モッテンケンドヨー。
あの　人なんか　あれ　変わり者だから　地所 [を]　持っているけれどね。
［千葉 _12_b_014_20910］

最後に，上記以外の千葉の例を見る。千葉では，/j/ が後続する環境で撥音化が起こっている例がある。13 例中 2 例に撥音化が見られる。なお，下の（13a）と（13b）は同一話者のひと続きの発話である。

（13） 撥音化（__ /j/）の例

a. スグニ　モッテクンヨ。
すぐに　持ってくるよ。　［千葉 _12_b_010_60370］

b. モッテクンヨ　ホー　ナンテヨ。
持ってくるよ　ほう　なんて。　［千葉 _12_b_010_60440］

以上に挙げた実例を基に，撥音化・促音化が生じる例外的環境を（14）にまとめる。（14）は方言間に見られる音環境のバリエーションの存在を指摘するものである。

（14） 撥音化と促音化の例外的環境

a. 神奈川では，撥音化が破裂音が後続する環境に起こることがある。

b. 千葉では，撥音化が接近音 /j/ が後続する環境に起こることがある。

c.　山形では，促音化が摩擦音 /s, h/ が後続する環境に起こることがある。

神奈川に関しては，日野（1984）の観察と合致し，木川・久野（2012）が行った意識調査の結果が自然談話データによって実証された。千葉と山形に関しては，得られたデータが限定的であるため，本稿では個別の実例の報告に留め，今後データの拡充を行いたい。

4. 考察

本節では，3 節に示した動詞ラ行音節の撥音化と促音化の二つの調査結果に基づき，両者の相関関係と分布について考察を行う。
表 7 に，これまでに示した結果をまとめて再掲する。

表 7　まとめ：撥音化と促音化の割合

地点	撥音化	促音化		
		__ /t, k/	__ /d, g/	全体
青森	**10.0%**	0.0%	0.0%	**0.0%**
岩手	**50.0%**	94.1%	0.0%	**61.5%**
宮城	**91.1%**	93.8%	83.9%	**90.1%**
秋田	**0.0%**	0.0%	0.0%	**0.0%**
山形	**20.0%**	100.0%	76.6%	**77.1%**
福島	**94.0%**	98.1%	0.0%	**95.3%**
茨城	**94.9%**	82.4%	16.7%	**77.5%**
栃木	**95.0%**	53.3%	−	**53.3%**
群馬	**24.4%**	1.8%	0.0%	**1.7%**
埼玉	**25.0%**	10.5%	0.0%	**9.5%**
千葉	**66.3%**	63.1%	45.5%	**60.5%**
東京	**16.0%**	5.0%	−	**5.0%**
神奈川	**31.1%**	2.1%	−	**2.1%**

表 7 では，撥音化と促音化の頻度の高さは概ね相関しているように見える。両者の相関関係の有無を明らかにするために，表 7 に対して相関分析を行った結果，両者には強い正の相関が確認された（r=0.798）。図 3 に撥音化の割合と促音化の割合の相関関係を表す散布図を示す。散布図では横軸が撥音化の割合，縦軸が促音化の割合である。

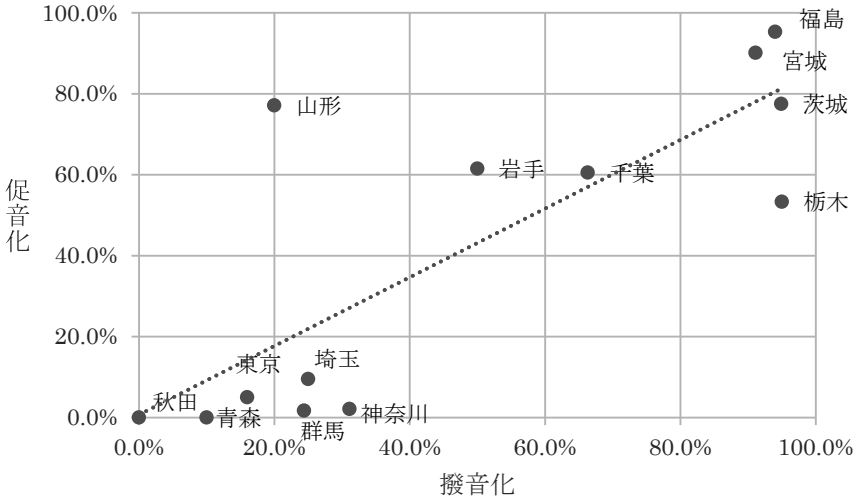

図 3　撥音化の頻度と促音化の頻度の散布図

続いて，撥音化と促音化の分布の特徴を整理するため，両者の相関関係に基づいてクラスター分析（平方ユークリッド距離，ウォード法）を行った。その結果を図 4 に示す。

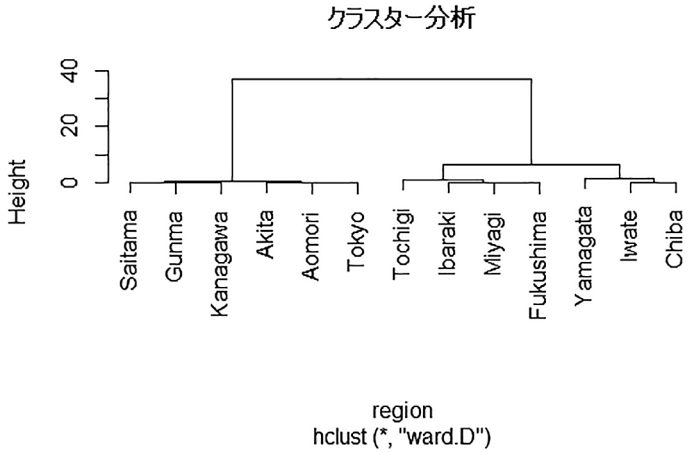

図 4　関東・東北地域の分類

図 3 の散布図と図 4 のデンドログラムから，撥音化と促音化の両方が多い宮城・福島・茨城と，それと比較して促音化が少なく中程度である栃木とが分離され，かつ，促音化と撥音化が中程度である岩手・千葉と，それと比較して撥音化が少なく，促音化が多い山形とを分離できるという点で解釈が容易な五つのクラスターを採用した。以下にまとめる。

(15)　a.　撥音化と促音化の両方が多い：宮城・福島・茨城
　　b.　撥音化が多く，促音化が中程度：栃木

c. 撥音化と促音化の両方が中程度：岩手・千葉
d. 撥音化が少なく，促音化が多い：山形
e. 撥音化と促音化の両方が少ない：秋田・青森・群馬・埼玉・東京・神奈川

分析結果とそこから得られた（15）に基づき，ラ行音節の撥音化と促音化の分布に関して次のことを指摘する。二つの現象は関東・東北地域にまたがり，太平洋側の宮城・福島・茨城を中心に生じている。そして，その中心部から周囲の栃木・岩手・千葉に広がっており，中心から離れた周辺部に向けて少なくなっている。

ここで問題となるのは,（15d）の山形である。山形が直線の予測値と実測値の差が最も大きく，促音化が多ければ撥音化が多くなるという全体的な傾向に反している。当該地点では促音化が 77.1% であるのに対し，撥音化が 20% となっている。ここで，試みに，撥音化の有無を基準に動詞を振り分けてみる。観察対象となるデータの総数は 20，そのうち撥音化が起こっているデータの数が 2 である。撥音化の有無を基準に動詞を振り分けると（16）のようになる。( ) 内の数字は実例数である。

（16） a. 撥音化が起こっている：なる（2）
b. 撥音化が起こっていない：なる（1）眠る（2）わかる（1）作る（3）知る（1）

動詞の別からは撥音化の有無を決定づける要因を特定することは難しい。「なる」に撥音化が起こる場合と起こらない場合があることにも注目したい。

本稿では，他の地点とは異なる山形の特殊な状況に説明を与えることはできないが，今後，山形の撥音化を考察する上で考慮すべき現象がある。（12a）に記した通り，山形では破裂音が後続する場合にわずかながら撥音化が観察される点である。具体的には，語頭子音が有声破裂音 /d/ である「ど（と）」「ども（けれども）」の助詞が後続した場合である [7]。山形の撥音化には他の地点とは異なる音韻形態論的条件が関わっている可能性が示唆される。これを明らかにすることは今後の課題とする。

5. まとめと課題

本稿では COJADS を用いて，関東・東北地域の自然談話データに見られる動詞ラ行音節の撥音化・促音化の実態を報告した。具体的には，以下の三点を指摘した。

（17） a. 撥音化と促音化の現象は関東・東北地域に連続して分布しており，宮城・福島・茨城を中心として，その周辺に広がっている。［4 節］
b. 撥音化と促音化の頻度には強い相関があるが，山形が例外となっている。［4 節］
c. 撥音化と促音化が起こる音環境には方言間のバリエーションがある。［3.3 節］

今後の課題は，第一に，山形における撥音化と促音化の頻度の偏りに説明を与えることである。

[7] 山形ではラ行音節に有声破裂音が後続した場合，促音化が起こるのが通常である（表 6 参照）。

第二に，宮城における「有声子音の連続」がこの地域に一般的な音配列であるのか，ラ行音節の促音化によって生じる特別なものであるのかを明らかにすることである。第三に，ラ行音節が撥音化・促音化する音環境の分析を進め，記述を精緻化することである。

参照文献

飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）（1982–1984）『講座方言学』第 4 巻～第 9 巻．東京：国書刊行会．
上野善道（編）（1989）『日本方言音韻総覧』東京：小学館．
大橋勝男（1974）『関東地方域の方言についての方言地理学的研究 第一巻』東京：桜風社．
木川行央・久野マリ子（2012）「神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化」*Scientific Approaches to Language* 11: 89–101.
高山倫明（2012）『日本語音韻史の研究』東京：ひつじ書房．
田附敏尚（2019）「動詞におけるラ行音の撥音化・促音化現象」東北大学方言研究センター（編）『生活を伝える方言会話―宮城県気仙沼市・名取市方言―分析編』3–23．東京：ひつじ書房．
日野資純（1984）「神奈川県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）（1984）『講座方言学 5―関東地方の方言―』273–302．東京：国書刊行会．
松浦年男（2018）「山形県村山方言における有声促音の音声実現に関する予備的分析」『北星学園大学文学部北星論集』55(2): 43–52.

関連 Web サイト

国立国語研究所『日本語諸方言コーパス』https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html（2022 年 12 月 9 日確認）
国立国語研究所 コーパス検索アプリケーション『中納言』https://chunagon.ninjal.ac.jp/（2022 年 8 月 30 日確認）

/r/ Syllable Alternation of Verbs in the Kanto and Tohoku Regions: A Study Based on the Corpus of Japanese Dialects

SATO Kumiko

Adjunct Researcher, Research Department, NINJAL

Abstract
Syllables containing the consonant /r/ (henceforth, /r/ syllables) often undergo sound alternation to a moraic nasal called *hatsuon* and to moraic consonants called *sokuon* in the natural Japanese discourse. This alternation is found throughout Japan and unevenly distributed geographically (Uwano 1989); furthermore, the frequency and environment vary among dialects (Ohashi 1974, Hino 1984, Tatsuki 2019). Using the Corpus of Japanese Dialects, this study reports the actual situation of /r/ syllables alternation of various verbs found in natural Japanese discourse of the Kanto and Tohoku regions. The following points are highlighted: (i) The alternation occurs from Kanto to Tohoku, but it occurs more frequently toward Miyagi, Fukushima, and Ibaraki and less frequently away from them; (ii) the frequency of alternations is generally correlated, but not in all dialects; and (iii) in the alternation environment, dialectal variations are observed.

Keywords: Corpus of Japanese Dialects (COJADS), Tohoku and Kanto dialects, /r/ syllable, moraic nasal alternation, geminate alternation